

大阪大学工学部生物工学系同窓会

尚醸会会報

第 25 号

大阪大学工学部

醸造工学・醗酵工学・応用生物工学・バイオテクノロジー（学科目担当）教室

同窓会

尚醸会バイオテクノロジーセミナー（同窓会）

本年度は対面形式と Web 配信を組み合わせた、
ハイブリッド形式での開催とさせていただきます。

開催日 令和 4 年 11 月 12 日（土）

開催方法 対面形式（吹田キャンパス、サントリー記念館メモリアルホール）および
Web 配信（Zoom）のハイブリッド

プログラム

14:00 受付開始

14:30 総会

15:00 近況報告会

15:00-15:40 梶浦 智義 氏

BASF ジャパン株式会社

ニュートリション&ヘルス事業部 ファーマ・ソリューションズ

アジアパシフィック地域 営業本部長

（平成 10 年卒，平成 12 年修士修了）

「リーダーの作法」

15:50-16:30 梶田 美恵子 氏

立命館大学

生命科学部 生命医科学科 助教

（平成 15 年修士修了）

「発がんの初期段階に起こる現象の解析 + α 」

16:30 閉会

*交流会は実施いたしません。

出席される方は、下記 1～3 のいずれかの方法でお申し込み下さい

1. 出席申込フォーム (URL: <https://forms.office.com/r/XJuMu35LbN>)

(右記 QR コードからもアクセス可)

2. E-mail (doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp)

3. 同封の用紙にて Fax または郵送

当日までに参加申し込み時にご記入いただきましたメールアドレスに Zoom の参加に必要な情報をお送りいたします。



出席申込フォーム ↑

目 次

巻頭言	島田 裕司	1
会長就任にあたって	関 達治	2
教室の最近の動向	村中 俊哉	3
各研究室の近況		5
教員紹介	梶浦 裕之	9
<<同窓会通信>>		
追悼 新名 惇彦 先生	二宮 保男	10
一升瓶の魅力	藤原 伸介	12
徳島大学より	内山 圭司	13
令和3年度尚醸賞の授与		14
令和3年度 工学賞・楠本賞を受賞して	櫻井 翔太	15
令和3年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー 報告	梶浦 裕之	16
尚醸会企画 OB・OG との座談会 開催報告	安本 周平	17
日本生物工学会創立 100 周年を迎えて	福崎 英一郎	18
回想 旧制高校	松田 祥吾	21
令和3年度 同窓会会計報告		
大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則		
同窓会現組織・会員の動向		
●教職員の異動		
●会員訃報		
●令和4年3月卒業、修了生進路等		
●教室の構成		
●クラス会幹事		
会員各位		

巻頭言 はやぶさ2の記事に接して思うこと

島田裕司（昭和47年卒）

去る6月10日、朝刊の1面から『46億年前の砂 命の謎に迫る』という見出しが飛び込んでくる。太陽系の成立という壮大なロマンに駆り立てられた一瞬である。

最先端の科学技術を結集した探査船はやぶさ2は小惑星リュウグウの砂を持ち帰るという使命を持ち、2014年12月に種子島宇宙センターを船出しました。メディアが注目し始めたのは2018年6月、はやぶさ2がリュウグウに到着した頃からでしょうか。地球から3億kmも離れた小惑星で、搭載されていた探査機が自律でカエルのように飛び跳ねて地表を調べている様子が公開されました。約半年の探索を終えてはやぶさ2は地表の砂を採取し、さらにその半年後に人工のクレーターをつくって地中の砂の採取にも成功したとき、日本の技術力の高さに感動したことを思い出します。

リュウグウを離れて1年後の2020年12月、砂の入ったカプセルは地球に向かって切り離され、オーストラリアの砂漠で回収されました。カプセルの中には想定していた量の50倍、5.4gの岩石が入っており、ミッションは完璧に達成されました。コロナ禍で暗い報道が続く中、このプロジェクトに参画した人達の大きな喜びはもちろん、私達にも宇宙の謎を解くという夢を与えてくれました。

そして先日、小惑星リュウグウの砂からアミノ酸と水の存在を確認したという記事に接します。これにより地球の生命誕生に欠かせないアミノ酸は宇宙から飛来したという説が補強されたこととなります。6月9日のサイエンスに掲載された論文によると、この成果は採取した5.4gの砂の内、94mgを使って103人のチームで分析した結果のようです。

科学者、技術者は未知の事象に対して興味や好奇心を持ち、前人未踏の事象に挑戦したいという気持ちを持っています。太陽系成立直後の小惑星から砂を持ち帰り、太陽系の成立や地球生命の誕生という謎を解くというロマンに満ちたミッション。このプロジェクトに500人以上が参画しているそうです。ミッションに対してはワン・チームになれても、理想と現実の間にはギャップがあります。このギャップを埋めてプロジェクトを1つの完成形に作り上げるのに必要なものはコミュニケーションでしょう。そして、プロジェクトの規模が大きければ大きい程コミュニケーションの重要度は増してきます。

1980年代以前、コミュニケーションの手段はフェイス・トゥ・フェイスが基本で電話や手紙が使われていました。1990年代に入ると手紙はe-mailに変わり、直近の2年、我々はコロナ禍を経験し、コミュニケーションにWEBが導入されました。最近では学会、研究会、講習会、授業、会議、商談、そして飲み会までもWEB開催を取り入れています。

WEBを活用したコミュニケーションには時間と距離の壁をなくせる利点があります。一方、雑談、相手の表情やしぐさを通じて相手を知り、相手の立場を想像してコミュニケーションを深めるには限界があるようにも感じます。しかし、WEB会議は今後の研究活動のツールの一つとして定着するでしょう。色々な研究成果の公表手段を効率よく活用し、当学科が今以上に世界における生命工学のメッカとして、その地位を高められることを期待しています。

会長就任にあたって

関 達治（昭和 42 年卒）

この度、吉田敏臣先生から尚醸会々長就任の要請をいただき、お断りするすべもなくお引き受けすることになりました。つきましては、老骨に鞭打って会長職を務めたいと思いますので、皆さまのご指導とご協力をお願い申し上げます。また、二宮保男氏（昭和 46 年卒）には引き続き副会長をお願いし、もう一人の副会長職を原島俊氏（崇城大学教授・昭和 47 年卒）をお願いしました。お二人と共に、福崎英一郎教授（幹事長）を筆頭とする幹事長会の皆さまと尚醸会の運営に携わりたいと思いますので、何卒よろしく願いいたします。



さて、2019 年年末に始まった新型コロナウイルス感染は、変異型オミクロン株が主となりましたがなかなか収まらず、このご挨拶原稿を執筆している 2022 年 7 月初めでも感染が収まっておりません。オミクロン株は重症化率が低いとされ、社会活動の制限はほぼ解除される方向ですが、皆さまにはまだまだ何かとご不便な日常をお過ごしかとお見舞い申し上げますとともに、活動が徐々にありますが、活発なることを期待しています。

本筋の尚醸会にお話を戻しますが、皆さまが卒業した大学院研究科は 2020 年に「生物工学専攻」となり、工学部の学科は 2021 年に「工学部応用自然科学科バイオテクノロジー学科目」と改称されました。ご存知のとおり、私たちの卒業した学科は 1896 年に発足した大阪工業学校化学工芸部（応用化学科、染色科、窯業科、醸造科、冶金科）を源とします。学科の歴史については大学院工学研究科『生物工学専攻』の概要（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/about/history.html>）をもう一度ご覧いただければと思います。歴史はなかなか波瀾万丈に満ちていて、楽しいと思いますヨ。

同窓会は「大阪高等工業学校醸造会」として 1910 年に発足しましたが、何時の間にか、醸造会（現日本生物工学会）は学術団体としての活動を中心として活動するようになりました。その後、同窓会活動を再活性化するため、大嶋泰治名誉教授の発案で同窓会を「尚醸会」と改称し組織的な活動を 2006 年に再開し現在に至ったのはご存知のとおりです。

私事ですが、1962 年に照井堯造先生の研究室で卒論を行い卒業、大学院に進学しましたが中退し、1970 年に助手として大嶋研究室に奉職しました。この年には学科が 6 講座になりサントリー記念館が寄贈されました。それ以降、田口研究室、吉田研究室（生物工学国際交流センター）と渡り歩き、2007 年センター長を最後に定年退職しました。79 才になろうとする時に会長職をお引き受けすることになりましたが、何卒よろしく願い申し上げます。尚醸会が卒業生の皆さま、さらには学生の皆さまにより親しみやすい同窓会となるよう、徐々にではありますが努力したいと思います。先ずはご挨拶まで。

教室の最近の動向

生物工学専攻 専攻長 バイオテクノロジー学科目 学科目長 村中俊哉

2022年度の専攻長（大学院）、学科目長（学部）を拝命しました村中俊哉です。大学院の専攻再編により生物工学専攻として3年目、学部の方も応用生物工学科目からバイオテクノロジー学科目に名称変更して2年目になり、わたしどもの「生物工学」あるいは「バイオテクノロジー」の名称が学内外に定着しつつあります。

生物工学専攻では、現在で、教授6名、准教授7名、助教4名が在籍しております。専攻の教員に加え、専任教員として、生物工学国際交流センターの4名、情報科学研究科バイオ情報工学専攻の6名、産業科学研究所フットニックバイオテクノロジー研究室の4名、そして蛋白質研究所蛋白質結晶学研究室の3名が加わり、これらの専任教員が協力して、バイオ関連研究室グループ（以下、教室）として、学部、大学院での教育研究を行っています。当教室には、専任教員に加えて、令和3年度は特任教員17名、招へい教員数は日本人教員が11名、外国人教員が1名、特任研究員13名、技術職員1名、さらに多くの技術補佐員ならびに事務補佐員が在籍し、教育・研究に関与しています。産学連携では、3つの協働研究所、5つの共同研究講座も当教室と密接に活動いただいています。また、農研機構から楠本憲一博士をお招きして、麹菌育種工学寄附講座を開設し、本年5月に寄附講座開設記念シンポジウムを開催しました。

学生につきましては、現在当教室には、英語コース所属の大学院生を含め、博士後期課程60名（日本人32名、英語コース28名）、博士前期課程132名（日本人108名、英語コース24名）、学部研究室配属学生63名が在籍しております。さらに、学部2年次の分属では昨年度に続き、バイオテクノロジー科目が応用自然科学科で学生に最も人気が高い学科目となり最終的に62名が分属されました。

昨年度の専任教員の異動につきまして、3月に古賀雄一先生が岡山理科大学の教授として、木谷茂先生が青山学院大学の教授として、岡野憲司先生が関西大学の准教授として、堀口一樹先生が大阪大学基礎工学研究科の助教として、それぞれ転出されました。一方、今年度に入って、4月に山本陸先生が助教として着任され、同じく4月に鳥巢哲生先生、山野範子先生、三崎亮先生が准教授に昇任され、また、5月にはSASTIA PRAMA PUTRI先生が准教授に昇任されました。7月には生物工学専攻として最初の博士学位取得者である山口祐希先生が助教として着任されました。

国際交流、留学生交流につきましては、以前から継続している生物工学専攻における博士前期後期課程のバイオテクノロジー産学共創グローバル人材育成特別プログラム（通称：英語コース）では昨年度、国費優先配置枠が採択されるとともに、博士前期課程のダブルディグリープログラム（DPP）では、これまでのマヒドン大学（タイ）、モンクット王工科大学（タイ）、バンドン工科大学（ITB）（インドネシア）に加え、新たに、チュラロンコン大学（タイ）のプログラムが開設されるなど、ますます充実した活動となっております。

表彰・受賞については、長年にわたるインドネシアの科学技術の発展に貢献された福崎英一郎先生が7月にITBからGanesha Widya Jasa Adiutama（通称：ITB賞）を表彰されるとともに、

研究員や学生がさまざまな学会で優秀発表賞やポスター賞を受賞しております。

新型コロナウイルスによる影響は、今現在も続いております。教育の場では、収容定員の2/3以下で感染対策を施した上で対面授業を率先する一方、感染学生に配慮したハイブリッド形式の授業も進められています。また、昨年度まで新型コロナウイルスの影響により、活動を中止していた、短期留学プログラム（SSSV）については、今年度、感染対策を慎重に施した上で、実施する方向で準備が進められております（7月現在）し、昨年度完全オンラインだった博士論文公聴会や英語コース修論発表会なども、ハイブリッド開催を行うなど、ウイズコロナ／ポストコロナを志向した対応となっております。

気候問題、世界情勢などますます混沌とした時代となっておりますが、健康、環境、食糧といったグローバルかつローカルな問題解決に、私たち教室メンバーならびに卒業生が関わることがますます大きくなるとともに、責任も増していると感じます。

今後とも当教室に多大なご支援のほど何とぞお願い申し上げます。

各研究室の近況

【生物資源工学領域】2022年度の福崎研は学部生6名、修士13名、博士16名とスタッフを合わせた合計51名のラボになりました。留学生は11名であり継続して国際的なラボになっています。また、福崎研の3本柱である、国際交流、産学連携、男女共同参画の一環として女性教授1名が本年度も引き続きクロスアポイントメント制度で在籍しており、5月にはSastia Prama Putri助教が准教授に昇任いたしました。また昨年度より、工学研究科テクノアリーナ最先端研究拠点として「福崎フロンティア産業バイオ連携拠点」が立ち上がりと共に、JST COI-NEXT「大阪大学革新的低フードロス共創拠点」も立ち上がり、これまで以上に食品とりわけフードロス解消に向けた研究を行っています。コロナについては「With コロナ」の精神で、ラボミーティング等は完全オンラインからハイブリッドに移行し、学生が発表をする機会を積極的に設けています。

【生命環境システム工学領域】今年度は学生、教員を含めて26名の体制でスタートしています。昨年度は博士後期課程に在籍していたChristelle Alexa Garcia Perezさんの「Sense-overlapping lncRNA as a decoy of translational repressor protein for dimorphic gene expression」の研究が評価され、第22回日本RNA学会年会「優秀賞」を受賞しました。また一昨年度博士後期課程に在籍していたPijar Religiaさんが行っていた「Mutation of the Cytochrome P450 CYP360A8 Gene Increases Sensitivity to Paraquat in *Daphnia magna*」の研究が米国の環境毒性化学会のTop 10 Exceptional Papers of 2021に選出されただけでなく、Pijarさんが同学会のBest Student Paper Awardを受賞しました。SDGsの意識が高まる中、生命と環境をキーワードにしている私たちの研究室がさらに活性化して貢献できるように頑張っています。

【高分子バイオテクノロジー領域】2018年4月から始まった研究室シーズン1でしたが、尾山博章君と米田早紀さんの2名が博士号を取得・企業へ就職し、2022年3月に終結となりました。2022年4月から始まったシーズン2では、鳥巢先生が4月に准教授に昇任され、山口祐希先生（早期修了・生物工学専攻博士号取得第1号）が7月に助教として加わりました。今年の内山研は、特任教員、特任研究員、研究補佐員、秘書、招へい研究員などのスタッフが全部で22名、学部生6名、博士前期20名（うち留学生3名）、博士後期9名（社会人3名）の合計57名の研究室でスタートしています。主な研究テーマはバイオ医薬品や遺伝子治療ウイルスベクターの品質管理、分析と製剤、食品の物性と機能性の解析です。研究成果は数多く得られており、海外での研究成果発表も再開しています。シーズン2も充実した研究室となるように頑張りたいと思います。

【細胞工学領域】2022年度の村中研は学生、教職員を合わせて総勢33名となり、植物の特化代謝に関わる研究を日々進めています。新型コロナウイルスの影響により、研究室行事（歓送迎会やラボ旅行など）の実施が難しい状況ですが、研究は着々と進んでいます。昨年度に民間企業と開始したNEDOプロジェクト「微生物によるグリチルレチン酸および類縁体の生産システム実証」も今年度からは助成フェーズに移行しています。他にも研究成果が続々と発表されています。ぜひ、研究室ホームページを訪れて確認してみてください。また、近くにお越しの際は、ぜひ顔を見せて研

研究室にお立ち寄りください。

【生物プロセスシステム工学領域】本領域は、堀口助教の基礎工学研究科への異動に伴い、山本陸助教を迎え新たなチームとして活動を行っております。本年5月末現在、教員3名（紀ノ岡、金、山本）、特任教員・研究員などで41名、学生34名と、大所帯かつ国際的な研究室となっており、新たな学問体系「細胞製造性」を軸とし、社会実装に向けた産官学連携にて活動しております。細胞製造コトづくり拠点の活動としても、本年4月より、新たに「細胞製造デザイン学（CET）共同研究講座」が開設され、1つの協働研究所および5つの共同研究講座と連携し、コトづくりを邁進しております。

【生物化学工学領域】本年度より古賀先生が岡山理科大学教授にご栄転となり、山野先生が准教授にご昇進されました。学部7、修士14、博士9、招へい・特任教員/研究員とスタッフで7か国47名の8年目です。大政先生は、引続き大阪大学総長補佐（教育オフィス）、工学研究科副研究科長・教育学務国際室長（教務委員長）として全学/工学研究科の教育全般に携わり、客員教授（神戸大）、日本動物細胞工学会会長、日本生物工学会理事（関西支部長、100周年記念大会実行委員長）、AFOB-DSG（10月からは会長）、MAB組合PLも務めてます。AMED-国産細胞PJ（統括PL大政）、AMED-革新的な次世代抗体医薬品製造技術の開発（PI山野）、遺伝子治療製造PJ（PL大政）、NEDO、科研基盤A（大政）、C（山野）と研究PJも充実しています。近くにお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

【バイオ情報計測学講座】バイオ情報計測学講座は2018年4月に発足しました。2021年の3月には一期生が無事に卒業するなど、活動を本格化させています。COVID-19の対応を学生、スタッフが協力して実施し、日々の研究を続けることができました。一方、多くの学会がオンラインとなり、研究室旅行にも行けず、研究室外での活動には制限が残りましたが、2021年12月にはタイミングよく学生とオンサイトの学会に参加することができました。現在は、教授：松田史生、准教授：岡橋伸幸、助教：清家泰介の布陣で応生の学部教育を担当しております。2022年度は学部生5名を迎え、修士11名、博士2名、スタッフ8名の計27名（6月現在）の布陣でバイオテクノロジーを基盤に生物、計測、情報を融合した研究を活発に進めてまいります。

【代謝情報工学講座】令和4年度は学部生5名、修士12名、博士2名、スタッフ8名の合計27名のラボとなりました。昨年度は日本生物工学会第29回生物工学論文賞1件の他、学生の学会でのポスター発表賞2件受賞しました。新型コロナウイルスの状況も落ち着きつつあり、研究室内セミナーやディスカッションが少しずつ対面形式になり、研究活動も平常に戻りつつあります。基盤S、基盤C、挑戦的開拓、挑戦的萌芽の科学研究費補助金の研究、JSTの研究など行いました。これからも代謝工学の研究を通じて社会に貢献できる様に励んで参ります。近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

【応用微生物学領域】本年度はG30を含む学部4回生が7名、修士課程学生が21名、博士課程学

生が7名、研究生2名、技術補佐員1名および補佐員1名、スタッフ3名の合計42名の体制で運営しています。国際色豊かな研究室で、日本人学生を含む7カ国に及ぶ学生が明るくアットホームな雰囲気のもと共同、協力して研究活動を行っています。昨年度に行われた修士1年生の中間発表では優秀発表賞に日本人2名が選ばれ、また学会発表も積極的に行うなど研究においても充実した成果を残しています。コロナ禍での活動制限も徐々に緩和されつつあり、諸々のイベントの再開を心待ちにしております。研究室活動の様子は、生物工学国際交流センター・藤山研究室のホームページコンテンツ「藤山研通信」にて頻繁にアップデートしていますので、是非ご覧ください。

【分子微生物学領域】2022年4月より、木谷 茂准教授が青山学院大学教授、岡野憲司助教が関西大学准教授、また特別研究員の佐藤 悠さんが山口大学の助教へとそれぞれ昇任・異動されました。一方で、産業技術総合研究所より宮崎健太郎先生が特任教授として着任されたほか、渡航制限のため長らく入国待ちであった留学生たちも順に研究室に加わり、大きなメンバーチェンジを経て本年度の活動をスタートさせています。研究では、日本生物工学会の論文賞や大会トピックス賞、酵素工学会の優秀ポスター賞を獲得するなど高い評価をいただくことができました。短期交換留学プログラム（通称SSSVプログラム）をはじめとする各種の国際交流活動の再開に向けた準備も本格化しており、慌ただしい日々を過ごしています。

【フォトリックバイオテクノロジー研究室】本年度は学生15名を含む31名で構成されています。昨年度は永井先生が第21回山崎貞一賞 バイオ・医科学分野、D2のZhai Le君が日本生物物理学会年会での学生発表賞を受賞しました。永井先生が領域代表を務めておられる新学術領域「シンギュラリティ生物学」と大阪大学先導的学際研究機構超次元ライフイメージング部門が共同開発した、1秒以下のワンショットでcmスケールの視野をサブ細胞レベルの空間分解能で撮像が可能なトランススケールスコープAMATERASに関して、大量細胞診断法の確立へ向けた共同研究をはじめ様々な共同利用が順調に進んでいます。また、さらなる視野の拡大、ロボットを用いた測定の自動化、巨大化したデータの解析を達成する3号機の開発が産研内で行われています。

【蛋白質結晶学研究室】4月に新4回生2名が配属され、年次進行で3学年が揃いました。博士後期課程にはドイツからの留学生が進学し、生物工学専攻所属の学生が7名になりました。最初の卒研生である修士の学生は研究も順調に進捗して、秋の生物物理学会にエントリーしております。専攻メンバーに加わって3年が経ち、今年から学部3年次の物理化学実験（構造解析）を担当することになりました。タンパク質の結晶化と構造計算の内容ですので、我々の専門性を活かして実り多い学生実験となるよう努力する所存です。今年4月から、JSTの戦略的国際共同研究プログラムに採択され、より一層国際性豊かに研究室運営を担っていきたいと考えておりますので、引き続きご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

【麹菌育種工学寄附講座】麹菌育種工学寄附講座は公益財団法人発酵研究所からの助成をいただき2021年10月に発足しました。麹菌が野生菌から家畜化した際の遺伝子レベルの変化の解析を行うことで新しい特徴を有する麹菌の育種とその産業利用を目指しています。皆様から多くの暖かい

ご支援を賜りまして、研究環境も整い活動を本格化しています。現在は寄附講座教授：楠本（憲）、寄附講座講師：酒井、寄附講座助教：田中、特任研究員：劉、事務補佐員：楠本（由）の体制で研究を進めています。5月13日には当寄附講座の開設記念シンポジウムをリモート形式で開催し、170名以上の方に参加いただきました。5月には酒井先生が学部学生実験を指導しました。また、企業や大学、国立研究機関との共同研究も立上げ、様々な視点からの研究展開を狙っています。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

教員紹介：生物工学国際交流センター着任のご挨拶

生物工学国際交流センター 応用微生物学研究室 助教 梶浦裕之（平成 15 年卒）

2019 年 10 月、生物工学国際交流センター（ICBiotech）応用微生物学研究室（藤山研究室）の助教として着任いたしました。藤山 和仁教授、ならびに三崎 亮准教授とともに日々の教育と研究に取り組んでいます。国際交流で伝統と実績のある ICBiotech のこれまでの活動を継承しつつ貢献し、さらに発展できるよう微力ながら精一杯尽力して所存ですので、尚醸会の皆様におかれましてはご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

私は 1999 年に大阪大学に入学し、2002 年 4 月に現在尚醸会 会長を務めておられる関達治教授の研究室に配属になりました。関研究室では現在の研究室の主宰者である藤山和仁先生（当時 准教授）に植物糖鎖に関する研究をご指導いただき、植物がもつ糖鎖合成経路の改変などを研究し、2010 年に博士（工学）を取得いたしました。その後、研究対象を植物から昆虫に切り替え、藤山先生の下で博士研究員としてカイコの糖鎖研究に従事しました。2012 年より日立造船株式会社の主任研究員となり、植物が生合成する天然ゴムなどの超高分子ポリマーの生合成・蓄積機構の解明に取り組みました。大学での研究のみに従事していた私にとって、“社会勉強”ができたこともあり、非常に有意義な時期を過ごすことができました。短期間ではありましたが、その企業に勤めていた際に経験したことを現在の学生に伝えることが私の現在の義務の 1 つであると考えております。日立造船を退職後、立命館大学 生命科学部 生物工学科の助教として 2 年半植物細胞壁生合成に関わる研究に従事しました。その後、現在の所属である ICBiotech に異動し、日々の教育と研究に献身しています。

私はこれまで生物での物質生産に興味を持ち、基礎研究から応用利用に向けた研究を行ってきました。現在は、主に植物、昆虫、酵母を宿主とし、産業利用を目指した分子育種と利用に向けた研究を進めています。中でも植物を利用した医療用タンパク質生産（Plant-made pharmaceuticals, PMPs）に注目した研究を実施するとともに、国内での PMPs 研究の活性化と加速のため、まずは国内の研究者との連携を図る取り組みを行っています。また現在の研究室主宰者である藤山教授にご協力いただきながら、企業在籍時に見出した天然ゴムの生合成と蓄積に特化した細胞の分化・形成機構の解明といった基礎的な研究も実施しております。

コロナウイルスによる様々な制限が緩和され、この 2 年間 web 会議、学会等に制約を受けざるを得なかった研究を取り巻く状況も、今後改善されることが予想されます。大阪大学、また研究室のみならず、ICBiotech のミッションである教育・研究をとおしての国際交流においても今後積極的に貢献してまいりたい所存です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



追悼 新名 惇彦 先生

二宮 保男（昭和 46 年卒）

新名先生が照井研究室の助手になられた頃、大学が意味不明の学生運動で荒れる中、幸運にも学部に入り込んだ私はお目に掛りました・・・学生実験を指導されている折でした。年齢も然程変わらない二十代ですが、新進気鋭の眩いばかりの研究者で「謹厳実直」のヒトという印象でした。が、ご指導を頂く中で、話しやすく何でも相談出来る先生と分かり、段々と深みに嵌って行きました・・・人柄と一言で表せない何かを感じました。巨人ファン（当時）を直隠し、居酒屋にも好くご一緒しました。親友の誘いもあって、大学院へ進む腹を決めましたが・・・成績の壁がありました・・・先生にどの様に勉強すれば良いか尋ねましたら・・・「博士課程まで行くか必ず聞かれるので、ハイと言えれば有利になる」とのこと。当時は修士までが普通でした。面接では、教授連の失笑を買いましたが、照井先生は喜んでくれました（と思います）。何とか合格し、約束通りに博士課程まで行くことになりました。

その後、照井教授が退官され、教授不在の 3 年間、研究室の運営では、江夏先生、小川先生と共に大変ご苦労されましたが、何故か学生には人気の講座で、卒研の希望者が非常に多かったのは驚きでした。ただ、この 3 年間は権謀術数には疎い先生にとり大変な心労になったと思います。しかし、教授になられてからの先生は、微生物から植物細胞の研究へ見事に転身された開拓者でした。奈良先端科学技術大学院大学に移られてからは、遺伝子工学の分野の技術を植物細胞に展開され、独自の研究分野を創出・確立されました・・・皆さまご承知の通りです。先生の「持続可能な循環型社会のために植物力を利用する」という哲学は、多くの門下生に引き継がれ、発展して行くものと信じております。

思い返しますと、阪大で先生とご縁が出来て以来、私の人生の重要な転機、大学院進学、就職、退職後の仕事、全て先生に面倒を見て頂きました。企業在職中には色々ありましたが、無事に定年まで勤めることが出来たのは、先生の顔を潰してはイカンと言う一念でした。私は先生に敷いて頂いた線路の上を走って来ました。多くのヒトが、分け隔てない面倒見の良さに甘



2015 年 2 月 8 日 奈良 NPO にて

えました・・・「傍観者」の言葉は先生の辞書には無い・・・その人柄ゆえ、先生の周りには多士済々が集い、常に何か面白いことが起きるのでは？と言う期待感がありました・・・本当に多くの皆さんとの交流がありました。お陰で、私も多くの友人・知己に恵まれ悠々自適の老後を楽しんでおりました・・・が、突然の訃報でした。

先生が闘病を続けながら色々な活動を続けておられることは承知しておりましたが、昨年春、治療終了と言う厳しい状況をお伺いし、言葉もありませんでした。それでも、まだまだ時間はあると油断していた矢先の訃報でした。何も無かった様に時間は過ぎて行きますが・・・ご家族の皆様はもとより、ご指導を受けて来た後輩・門下生にも消えることのない無念さや喪失感が・・・本当に残念でなりません。折に触れ、楽しかったり苦しかったりの若かりし頃のこと、冬のボストンでお目に掛ったこと・・・色々と頭を過ります。また、先生が立ち上げた奈良のNPOには先生の車での往復でした・・・いつも前向きなお話で元気を頂く時間でもありました。

先生は京都・五條坂にある大谷本廟におられます。其処では、先生との思い出に浸り、先生とお話することが出来ます。

一升瓶の魅力

関西学院大学生命環境学部 藤原伸介（旧教員）

「藤原さん、これうまいで」。先日、職場に福崎英一郎先生が遊びに来られました。手土産が一升瓶の日本酒でした。「冷でも爛でもいけるで」と言われていただくとピリッとした辛口でした。最近赤いラベルのパック酒が多くなっていたので、芳醇な香りの大吟醸酒は格別でした。あらためて眺めると一升瓶は美しい。そういえば一升瓶で酒を飲む機会がずいぶん少なくなりました。私は阪大の卒業生ではないのですが、第1講座（今中忠行先生）の研究室で助手を務めさせていただきました。お陰で一升瓶片手にいろいろな先生方や学生さんと話す機会に恵まれました。当時は吹田キャンパスもおおらかで、夕方になると教員も学生と頻りにビール瓶や一升瓶を開けていたような気がします。今中忠行先生、高木昌宏先生、森川正章先生には、大塚食堂やさわらびで、午後5時以降にご指導いただいたことが多いように記憶しています。その時の話題がきっかけに今も続けている研究もあります。最近の吹田キャンパスではこのような光景もなくなったと聞きます。学科名もいろいろ変遷を経て変わりましたが、醗酵工学科を礎にもつことが忘れ去られていませんか。いま学生と宴席を共にすると、ハイボールや酎ハイサワー系を好む方が多く、ビール、ワイン、日本酒を飲む人は少なくなっています。なぜ日本酒を飲まないか理由を聞くと「酔うから」と答えるのですが、酔わない酒は旨いのでしょうか？酔っ払って赤い顔をして、話し合うのが楽しいのではないのでしょうか。スマホ片手にラインやインスタをチェックしながら飲んでも楽しくない気がします。



いまポリアミンの一つアグマチンの機能について研究しています。アグマチンはアルギニンの脱炭酸で作られるのですが、認知症の抑制や筋力増強に効果的で日本酒に著量含まれます。色々調べるとアルコール発酵の過程で作られるのではなく、麹菌で糖化する過程で作られることがわかりました。アルコール発酵しない甘酒でも存在しています。また麹菌を経由する味噌や醤油にもアグマチンは含まれます。しばらく前に甘酒ブームが起こり、アレルギーフリーの飲む点滴として注目されました。そのときアグマチンが含まれていることは注目されませんでした。我々日本人は麹菌中心の味噌汁を飲み、醤油とみりんで味付けされた食事を食べ、日本酒を飲むことで意識しないでアグマチンを摂取しています。アグマチンの生理機能に関しては、この20年くらいの間にもものすごい数の論文が出ています。ただ多くの論文で、麹菌がアグマチンを高生産することに触れられていないのが残念です。麹菌は弱酸性下で蒸米内を菌糸成長するときアグマチンを放出します。数年前のポリアミンのゴードン会議で、高アグマチン甘酒を持参し紹介したことがあります。ところが甘酒を口にしたロシア人には、ワインやウオッカが不味くなると言われてしまいました。ロシア人男性の平均寿命は67.3歳、日本人男性は81.6歳です。ウオッカばかり飲まないで、甘酒や日本酒を飲んでいけば健康長寿につながるかと教えると、彼は甘酒を2杯も飲みました。次回は旨い日本酒も一升瓶で持参し、啓蒙活動を続けようと思っています。

徳島大学より

徳島大学先端酵素学研究所ゲノム制御学分野 内山圭司（平成4年卒）

私は、塩谷捨明先生のご指導の下で学位を取得後、同研究室で助手を務めた後、2004年に大阪大学を退職し、三菱化学生命科学研究所にまた、2007年からは徳島大学先端酵素学研究所に勤務しております。三菱化学生命科学研究所では、ゴルジ体・小胞体の形成・維持機構に関する研究に、徳島大学では糖尿病、神経変性疾患（プリオン病）に関する研究に携わってきました。昨年より徳島大学先端酵素学研究所ゲノム制御学分野教授・片桐豊雅先生にお誘い頂き、がん研究に取り組んでいます。この間、細胞小器官と小胞輸送を軸として研究を進めております。この度、尚醸会会報編集委員の松田先生から会報への近況報告の依頼のご連絡を頂き、これまで積極的に同窓会に関わることがなかったのでなぜ私がと思いましたが、せっかくの機会なのでお引き受けさせていただきます。しかし、近況報告といっても日常生活では変わったこともないので現在の研究内容について少し紹介させていただきます。

固形がんでは、血管形成不全のため正常細胞では見られない低酸素、グルコース飢餓といったストレス状態、微小環境が存在し、これがゲノムの不安定性、エピゲノム変化、エネルギー代謝変化などを引き起こし、薬剤耐性の獲得、免疫反応の回避などがんの悪性化の原因になることが知られています。この微小環境下では、細胞に対して常に小胞体ストレスが加わった状態となっています。このような継続的な小胞体ストレスは正常細胞にとっては最終的に細胞死を誘導する原因となりますが、がん細胞では小胞体ストレス応答が常に活性化した状態となっており、微小環境下においても生存、増殖できると考えられています。この適応機構を標的とした治療薬は、がん細胞に対する選択性が非常に高いことが期待されますが、微小環境下における小胞体ストレス応答の恒常的な活性化機構については十分には解明されていません。詳細について述べることはできませんが、現在、乳がん細胞において恒常的な小胞体ストレス応答の活性化を誘導する因子を同定しています。そして、その因子の機能阻害が、持続的な小胞体ストレス下における乳がん細胞の増殖を抑制、停止し、細胞死を誘導できることを確認しており、この因子の作用機序の解明を通してより限定的な治療方法の開発を目指しています。

以前に比べ治療薬・治療方法の開発が進みがん治療は進展したとは思いますが、現状では耐性株の出現や副作用などまだまだ課題も多く、また、抗がん剤治療に否定的な方々もおられます。私は、10年ほど前に家族をがんで亡くしており、その際、少しでも望みがあるのであれば次の治療薬をとる思いを、また、次の治療薬を選択できない絶望を私自身も少なからずとも感じておりました。当時、がん研究は私にとっては生々しくあまり関わりたくないという思いがある一方で、治療方法がない状況を何とかしたいという思いもありました。現在、私は、片桐豊雅先生のご厚意によりがん研究に携わる機会を頂きました。患者さんが希望を失わず治療に取り組めるような状況になるよう少しでも貢献できればと思っております。

令和3年度尚醸賞の授与

工学部応用生物工学コースの成績優秀者の努力を讃え、2022年3月24日に大阪大学サントリー記念館メモリアルホールにて、尚醸会を代表して副会長の関達治先生（2022年度より会長にご就任）より尚醸賞が授与されました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を期待しています。

尚醸賞受賞者のコメント

櫻井翔太さん

この度の尚醸賞の受賞、誠に光栄に存じます。未熟な私ですが、先生方や家族に支えられ、友人と切磋琢磨しながら充実した4年間を過ごすことができました。その結果、研究室の仲間と共に尚醸賞を頂くことができ、誠にうれしく思います。このような名誉に恥じないように、これからもより一層研究に励み、社会に貢献できるように努めて参ります。

小林祐摩さん

この度は尚醸賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。先生方や家族に支えられ、同じ研究室の仲間と共にこれまでの努力をこのような形で評価していただけたことを大変光栄に思います。今後より一層勉学に励み、社会に貢献できる人間として成長できるように日々努力を重ねていきたいと思ひます。

宮脇佳汰さん

この度は尚醸賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。先生方や家族、友人など多くの人に支えられながら、日々勉学に励んで参りました。その結果、このような形で表彰いただいたことを大変嬉しく思います。今後も感謝の気持ちを忘れることなく、社会に貢献できるような人になれるよう、切磋琢磨していきたいと思ひます。



授賞式での記念撮影（写真の左から、宮脇さん、関副会長、櫻井さん、小林さん）

令和3年度楠本賞、工学賞を受賞して

大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻 清水研究室
博士前期課程1年 櫻井翔太（令和4年卒）

この度、私は応用生物工学コースの代表として令和2年度大阪大学工学賞を、そして応用自然科学科の代表として楠本賞を頂きました。身に余る大変光栄でございます。このような名誉に恥じないように、これからも日々研鑽を怠らず精進していく所存でございます。

このような名誉ある賞を頂いたのも、講義において物理学、化学、そしてもちろん生物工学を常に熱心にご指導いただいた大阪大学の先生方、研究室において様々な実験の方法や研究の方針、心構えをご指導いただいた清水教授、戸谷准教授、二井手助教、諸先輩方、そしてともに切磋琢磨した友人たち、経済面だけでなく、精神面ともに私の学生生活を支えてくださった家族のおかげでございます。この場をお借りして感謝申し上げます。

先に触れましたとおり私は現在、清水教授の温かいご指導の下、光を用いて大腸菌の代謝を制御する研究を行っております。光を入力情報に代謝を制御することができれば、環境負荷の大きい薬剤などを使用することなく物質生産できるため、SDGsの達成や工業スケールでの物質生産コストの削減などが見込めます。日々の研究では仮説通りに結果が出るのが少なく、何が原因で仮説と異なったのか、改善するためには何を変えて何を変えないのかを考え続けております。このことは非常に困難で頭を悩ませることも多いですが、清水教授をはじめとした研究室の先生方、諸先輩方、同僚たちとの実りのある議論によって日々楽しく前進することができています。これからも日々の研究室生活で社会に貢献できるような成果を出すことを目指して、さらに、自分自身の成長もできるように研究を続けていきたいと考えています。

私は将来、微生物の力を借りて社会に貢献したいと考えております。それは微生物を用いたモノづくりで世界の人々に美味しいものや便利なものを届けて笑顔にすることや、環境問題や社会問題を解決する糸口になることなど、様々な方法があると考え、どの可能性も実現可能にできるように尽力していきたいと思っています。そして最後に、大阪大学工学部応用自然科学科応用生物工学コース卒業であることに恥じない人間を目指して研鑽を積み続けたいと思います。

令和3年度 尚醸会バイオテクノロジーセミナー報告

庶務幹事 大阪大学・現教員 梶浦 裕之 (平成15年卒)

令和3年11月13日、尚醸会総会ならびにバイオテクノロジーセミナーがZoomでのオンライン開催で行われ、同窓生65名に参集頂きました。コロナ禍も2年目となり、オンラインでの開催にも(悲しいことではあるが…)慣れた感がある中での開催でした。

総会では、吉田敏臣(S39卒)会長の挨拶、福崎英一郎(S58卒)幹事長による令和2～3年度の事業報告、渡邊肇(現教員)生物工学コース長の同コース現状報告、木谷茂(元教員)会計幹事からの報告、高松智監査役の会計監査承認が行われました。協議事項として、尚醸会口座名義の更新に伴う会則・付則の変更が審議され、承認されました。また、吉田敏臣会長の令和3年度限りでの退任と、それに伴う関達治 副会長(S41卒)の令和4年度 会長就任、原島 俊(S47卒)様の副会長就任も審議され、それぞれ承認されました。

引き続き開催されたバイオテクノロジーセミナーでは、3名の同窓生からご講演いただきました。更家悠介(S49卒)様には「サラヤのグローバルビジネス」というタイトルで、サラヤ株式会社、またご自身の世界規模での取り組みをお話いただきました。2人目には大井大輔(H12卒)様から「ファミリービジネスと事業承継(経営承継)の重要性」をお話し頂き、理系から経営コンサルティングに転身され、その後飽くなき好奇心と共に活躍されている内容を伺うことができました。3人目には田中俊一(H17卒)様から「敢えて厳しい道を選んで進んでみた～人生の半分を歩んで見えてきたもの～」という内容で、博士号取得、企業での研究、アメリカでの生活を通して経験した内容をお話しいただきました。3者ともに非常に興味深い内容で、時間が早く感じた、そんなご講演内容でした。

オンラインであれば、さらに活気と熱量のあるご講演であったことは間違いない。現段階ではまだ不透明ではあるものの、様々な状況が少しずつ好転し元の生活が戻りつつある中、可能であるならば今年度の尚醸会総会とバイオテクノロジーセミナーは、オンラインとオンラインのハイブリッドでの開催を個人的には希望しています。



3名のセミナーご講演者

尚醸会企画 OB・OG との座談会 開催報告

企画幹事 大阪大学・現教員 安本周平（平成 24 年卒）

OB・OG と学生の座談会は、例年、尚醸会バイオテクノロジーセミナーと同日に吹田キャンパス内で開催しておりましたが、令和 3 年度は新型コロナの影響を受け、オンライン開催と致しました。

【開催概要】

開催日時：2021 年 11 月 13 日（土） 10 時～12 時

開催方法：オンライン（Zoom を使用）

参加者：生物工学出身 OB・OG 6 名（企業幹事 3 名を含む）及び生物工学コース関連講座所属大学院生 4 名、学部生 2 名

開催内容：OB・OG 1 名と在学生 1 名のグループで 20 分のフリーディスカッション（Zoom のブレイクアウトルーム機能を使用）を 5 回実施しました。それぞれの自己紹介後、学生時代、社会人生活、就職活動、会社のことなどを OB・OG から紹介頂き、学生からの質問に回答いただきました。

【開催後の参加者の声（抜粋）】

- ・就活や学校生活について気になっていたことや不安に思っていたことを相談できて、本当に良い経験になりました。（学部 2, 3 年）
- ・非常に有意義な時間だった。OB さんの話を聞ける非常に有用な場所だった。（修士課程）
- ・今回は参加人数が少なかったこともあり、一対一で様々なお話を聞けたので良かったです。（修士課程）
- ・オンラインなので移動等が不要で気軽さがあった。学生との交流ができて新鮮だった。（OB・OG）

前回に引き続き、OB・OG と在学生の座談会をオンラインで実施することとなりました。参加者人数が昨年度よりも少なくなりましたが、1 回あたりのフリーディスカッションの時間を長く設定することができ、余裕を持った交流の場となったと考えています。また、対面の開催では、関西以外にお住まいの OB・OG の方に参加いただくことが難しいのですが、オンラインの利点を活かして、多くの OB・OG の皆様に参加いただくことができました。在学生にとっては、先輩との座談会を通して、数年後の自分達の姿を想像する良い機会になったかと思います。最後になりましたが、参加いただいた OB・OG の皆様、ご紹介頂いた先生方に御礼申し上げます。

日本生物工学会創立 100 周年を迎えて

大阪大学工学研究科生物工学専攻・現教員 福崎英一郎（昭和 58 年卒）

尚醸会の会員各位はすでにご存じのことと拝察しますが、我々の学科の同窓会をルーツとする公益社団法人日本生物工学会が、今年創立 100 周年を迎えます。小職は、現在、第 23 代日本生物工学会会長の立場にありますので、僭越ながら日本生物工学会と我々の学科（醸造、醱酵、応用生物工学）との関係を簡単に振り返りたいと思います。本稿をまとめるにあたり、日本生物工学会の HP 情報に加えて、新制同窓会の初代会長を務められた故芝崎勲先生（昭和 18 年卒）が中心となり編纂された「百年誌（大阪大学工学部醸造・醱酵・応用生物工学科）」ならびに、第 2 代会長を務められた大嶋泰治先生（昭和 30 年卒）が尚醸会会報第 10 号に寄稿された巻頭言を参考にさせていただきました。謹んでお礼申し上げます。

それでは、まず、126 年の歴史をもつ我々の学科の変遷を振り返りたいと思います。大阪大学工学部のルーツは 1896 年（明治 29 年）に創立された官立大阪工業学校に端を発します。創立当年には、機械工芸科と化学工芸科の二つの工芸科でスタートしたのですが、創立翌年の 1897 年（明治 30 年）には、機械工芸部（機械科の 1 科）と化学工芸部（応用化学科、染色科、窯業科、醸造科、冶金科）の組織となりました。その 4 年後の 1871 年（明治 34 年）には、官立大阪工業学校は、官立大阪高等工業学校と改称し、学科は、機械科、造船科、船用機関科、応用化学科、染色科、窯業科、醸造科、冶金科の体制となり、以後しばらく続くこととなります。その後 1929 年（昭和 4 年）、修業年限が 3 年の大阪工業大学となり、1933 年（昭和 8 年）、大阪帝国大学工学部醸造学科となりました。その後、研究テーマが醸造にとどまらず広い範囲で醱酵、食糧の分野を取り扱うことになったことに伴い、1943 年（昭和 18 年）に学科名を醱酵工学科と改めています。戦後、1946 年（昭和 21 年）に大阪帝国大学は大阪大学と改称され、さらに 1949 年（昭和 24 年）に新制大学として新たに発足しました。講座数もその後、1951 年（昭和 26 年）には 3 講座に増え、その後、1967 年（昭和 42 年）に大幅に改組拡充し、6 講座制となり、翌年 1968 年（昭和 43 年）、現在の吹田キャンパスに移転しました。その後、1991 年（平成 3 年）に醱酵工学科は改組され、8 講座を有する応用生物工学科となりました。その後、1995 年（平成 7 年）に大学院重点化に伴い組織は、大学院工学研究科応用生物工学専攻となり、学部組織は、応用生物工学科から応用自然科学科応用生物工学科目となりました。その後、2005 年（平成 17 年）に情報科学研究科が発足し、応用生物工学専攻より一講座分が割かれ、純増分を加えて二講座が新研究科に新設されました。その翌年、2006 年（平成 18 年）に大学院工学研究科の専攻を 10 個の専攻にまとめる改組が行われ、我々は、物質生命工学専攻（応用化学、応用物理、精密科学、応用生物の内容を含む学際専攻）と一緒に、生命先端工学専攻となりました。その後、2020 年（令和 2 年）に再び改組が行われ、我々は生物工学専攻として独立し、現在に至っております。なお、2021 年（令和 3 年）に学部の名称が、応用自然科学科バイオテクノロジー学科目に改称されました。

次に、同窓会と日本生物工学会の関係性を振り返りたいと思います。我々の同窓会のルーツを遡ると、1896 年の大阪高等工業学校創立当初から長きにわたり教授を務められた坪井仙太郎先生により学科創立 10 年を契機として、1910 年（明治 43 年）に在學生と卒業生を正会

員また特別会員とし、知識の交換と親睦を目的として設立された大阪高等工業学校醸造会にあたり
ます。大阪高等工業学校醸造会は、「醸造会誌」を年 1、2 回の発行のペースで 1922 年（大正 11 年）
まで併せて 27 号を刊行しました。坪井仙太郎先生が 1921 年（大正 10 年）に亡くなられ、その
後任として醸造会会長となられた西脇安吉先生（大阪高等工業学校醸造科教授）が「醸造会」を発
展的に解消し、卒業生を中心として月刊誌を発刊する「大阪醸造学会」を 1923 年（大正 12 年）
に設立されました。現在の公益社団法人日本生物工学会はこの 1923 年を設立初年として今年 100
周年を迎えます。大阪高等工業学校が大阪工業大学に昇格した 1929 年（昭和 4 年）に学会長は、
西脇安吉会長から教室主任教授の斎藤賢道先生に交代しました。その後、1940 年（昭和 15 年）
に斎藤賢道先生が大阪帝国大学を定年退官されると、中村静大阪帝国大学教授が第 3 代会長となり、
戦中戦後の 10 年間、会長を勤められました。大阪醸造学会が刊行を始めた月刊誌、「醸造学雑誌」は、
教室が 1943 年（昭和 18 年）に醸酵工学科に改称されたことに連動し、翌 1944 年（昭和 19 年）
に「醸酵工学雑誌」と改称し、戦争中も休刊することなく発行を続けました。その後、中村静第 3
代会長が病気のため会長を退かれることとなったため、その当時、すでに古希を超えておられた斎藤
賢道先生が 1950 年（昭和 25 年）から 4 代目会長として再び学会を牽引することになりました。
大阪醸造学会は、戦後、取り扱う領域を醸造学から醸酵工学、応用微生物学、食糧工学へと広げ、
順調な発展を遂げました。しかし、戦後復興し、工業発展と学術研究が隆盛に向かうにつれ、教職
員と卒業生を正会員とし、在学生を通常会員、他大学その他の出身者を特別会員とする大阪醸造学
会は大きな矛盾を抱えることになりました。すなわち、卒業生は自動的に正会員になりますが、学
術とは直接関係しなくなった正会員も多く、また、必ずしもその多くが会費を納入しているわけ
ではありませんでした。一方、学会の運営に対して発言権の無い特別会員が正会員数の 3 倍となり、
その活力が学会活動に無視できない状況になってしまったのです。このような学会の状態に対して
外部は勿論のこと、学会内部からも矛盾を指摘する声が大きくなってきました。その当時の醸酵工
学教室からも同窓会的組織が学会活動の主体をなすことは、今後の学会発展には適当では無いこと、
また、同窓会員たる少数の正会員のみが学会の運営方針に関与し、多数の同窓外会員がその権利を
持たないことについての批判が醸酵工学教室を含めて各方面から上がっていることなどの意見が上
がり、会則を改正すべきという機運が盛り上がっていました。ただ、同時に同窓会が母校教室（醸
酵工学教室）と協力して多年にわたり、学会誌の発行をはじめ多くの有意義な学会活動を続行して
きたことへの賞賛も当時の醸酵工学教室は表しています。このような大きな矛盾に苦慮されながら
斎藤賢道先生は長文の「会則変更に関する基本的な私見」を残し、1960 年（昭和 35 年）、82 歳
で天寿を全うされました。斎藤賢道先生の思いは 1961 年（昭和 36 年）から第 5 代会長となられ
た照井堯造先生に引き継がれました。照井堯造先生は、積極的に学会改革に取り組み、学会創立
40 年を迎えた 1962 年（昭和 37 年）に大阪醸造学会は、大改革を断行し、学会を担う主たる会
員はその出身に関わらず所定の会費を納める個人と学生となり、同時に名称を日本醸酵工学会と改
称しました。この一連の大改革を大嶋先生は、「ゲマインシャフト（共同体組織）とゲゼルシャフ
ト（機能体組織）が同一組織に混在する状態となっていた大阪醸造学会は、ゲゼルシャフト的立場
をとり、ゲマインシャフトの同窓会的要素を切り捨てた」と表現されています。その後、日本醸酵
工学会は 1971 年（昭和 46 年）に社団法人組織となり、醸酵工学科が応用生物工学科と改称され
た翌年の 1992 年（平成 4 年）に社団法人日本生物工学会へと改称されました。その後、2011 年（平

成 23 年) に公益社団法人化し、現在にいたっております。

上記のように我々の学科と日本生物工学会は長きにわたり、切っても切れない関係を築いてきました。126 年の歴史をもつ我々の学科はこれまで何度か学科存続の危機に瀕しました。最初の危機は、大阪高等工業学校が大阪工業大学に昇格する際、醸造学科がそのまま維持されるかどうか危ぶまれるという状況にありました。これに対して大阪醸造学会は、1927 年(昭和 2 年)ごろから存続のための活動を積極的に行いました。学会理事会は、「大阪工業大学に醸造科を独立存続すべきの議」という決議文を作成、当時の大阪高等工業学校の堤正義校長、文部大臣(水野錬太郎氏)、文部政務次官(山崎達之輔氏)などの VIP に陳情に及んでいます。1927 年(昭和 2 年)、水野文部大臣が来阪の折は、大阪醸造学会理事らと当時の醸造科科長であった西脇先生らが力を合わせて醸造科存続の必要性を長時間にわたり文部大臣に説明しました。このような必死のロビー活動の上で、醸造科は存続されました。大阪工業大学昇格時に採鉱冶金学科の「採鉱」と船用機関科が無くなったことを鑑みると、醸造科存続が本当に危うかったことが伺いしれます。もう一つの危機は、2020 年に大阪大学工学研究科の専攻を 9 つにまとめるという改組が行われた際の出来事です。改組の数年前から当時の工学研究科長から我々の専攻を応用化学専攻の一部に組み入れることが度々提案され、なかなか抗しがたい状況にありました。当時数年にわたり専攻長を務めていた小職は、研究科長の圧力に屈服しそうになりましたが、尚醸会の大先輩方から「絶対に応化に併合されることだけは避けるように」と叱咤され、歯を食いしばって併合に抵抗したことを覚えています。その際、我々の学科と生物工学会が二人三脚で発展を遂げ、日本の醸造産業、食品産業に多大に貢献してきたこと、21 世紀の重要キーワードである『食品』研究を主導できるのは我々だということ、また、醗酵工学をルーツとする我々の学問は応用化学と合併してもシナジー効果は得られないこと、また、今後の重要課題である SDGs 目標達成のためにも、生物工学専攻の独立存続が望ましいこと等を力説しました。結果として、極めて異例ながら生物工学専攻単独での存続を勝ち取りました。これも、日本生物工学会と同窓会のお陰であると思っております。以上、学科と学会の歴史について簡単に述べてまいりましたが、日本生物工学会は 2022 年、100 周年を迎え種々の記念事業を行います。また、10 月 17 日～20 日の日程で 100 周年記念大会をオンラインで開催します。色々な特徴あるシンポジウム等も予定しておりますので、ぜひご参加ください。詳しい内容は学会 HP をご参照ください。ウィズコロナ状況ですので、大々的な祝賀会は、来年度の名古屋大会時に実施する予定です。最後となりましたが、今回紹介した学会、学科、同窓会の歴史に関わる内容はすべてインターネット上で閲覧可能な資料に基づきます。興味のある方、特に若い方はご自分で検索されて、皆様方のルーツにしばし浸ることをお勧めします。

以上

旧制大阪大学工学部醸酵工学科昭和 28 年卒業生同窓会（二八会）の松田祥吾様より、旧教育制度において帝大の予備部門として機能し、明治時代末期から平成初期までの 90 年余、日本の各界の中枢となる人物を輩出した旧制高校の当時の姿を窺い知ることができるエッセイを、若い年代の同窓生へのメッセージも含めてご寄稿いただきました。

回想 旧制高校

松田祥吾（旧制昭和 28 年卒）

一、教育制度の移り変わり

明治維新をへて国際社会に参入した日本は西洋文化の急激な摂取を必要とし、教育の普及と充実が国家目標となった。学制が定められ小学校を義務教育とし中学校と大学をおいた。大学は欧米の一流大学を目指し帝国大学が設立されたが中学校との差が大きすぎるので予備部門として、明治十九年、東京・京都など五ヶ所に三年制の高等中学校が設置された。高等中学校は官立であり後に高等学校と改稱された。国勢の伸長に伴う帝大の増加に応じて増設され、最終的には七帝大・三十八高校となった。高校卒業生はより好みしなければ何れかの帝大に入ることが出来た。大学としては、医科・工科・商科などの単科大学も各々数校ずつあったが、当時、大学と言えばそれは帝国大学のことであった。

昭和二十年、太平洋戦争が敗戦に終り連合軍による占領が七年続いた。日本は占領軍総司令部の命令により大変革を強要され、明治以来の旧教育制度が現行の形に変更されたのもこの時期であった。旧制度の高校は四年制大学に変身し、五年制だった中学校は三年制高校に改められ、新たに三年制中学校が義務教育になってそれぞれ数が激増した。新旧両制度とも大学・高校・中学校などの呼称は同じでも内容・学力に差があるので、学制変更の当初は経歴を表示する場合など、新制大学卒、新制高校卒など冠稱を表示していた。このような表示の仕方は昭和三十年代の中頃迄続いたがやがて新制の冠稱は消滅し、替って旧制大学、旧制高校など「旧制」の冠稱を付記する習慣が広まった。

二、旧制高校

旧制高校は前述の通り三十八校でここへ進学する者はその年令人口の約一％であり難関であった。旧制高校は文科と理科に分れ、大学の文系学部を志望するものは文科、理系学部を志望するものは理科に入った。それぞれ第一外国語を英語とする甲類、ドイツ語とする乙類、フランス語とする丙類に分れ、文甲、理乙などと略稱されていた。生徒数は各校とも一学年文理合せて約二百人余、三学年合計六百数十人であった。

昭和四年生れの私は高校も大学もギリギリで旧制であった。三十八校の中、四国にあったのは松山と高知の二校で、徳島育ちの私は高知高校を選び昭和二十一年に入学した。敗戦直後の大へんな困窮と混乱の最中であった。生徒の出身地は東京・小田原を始め全国各地、特に京阪神が多かった。旧制高校の暮らしは教室と寮生活と運動部から成立っているというのが定説であり私の実感でもあるので、それぞれ記憶に残っていることを以下に説明したい。

【教室】教室では語学を重点にして一般教養を中心にした科目を十分に、かつ、ゆとりをもって学んだ。すぐれた教授陣によりマン・ツー・マンに近い人格的接触による人間教育が重視された。夜、教授官舎を訪ねたり、逆に先生が寮へ来られて雑談したり先生方と生徒は親密であった。しかし試験の採点はきびしく所定の点数に達しない場合は容赦なく落第となった。昭和二十一年度末の落第生は全校で七十名を越え、翌年度は更に増えて一〇六名となった。語学、特にドイツ語で落第する生徒が多かった。

【寮生活】特別の事情がない限り生徒は寮に入るようになっていた。寮は上級生を中心にした自治共同体である。木造二階建ての寮舎が南から順に一寮、二寮…と七棟並んでいた。各寮毎にリーダーとして寮長をおき、全体を総務が統括した。総務は成績優秀、人望の高い三年生で副総務がこれを補佐した。寮生規則ではなく学校による監督もなかったが万事、うまく運営されていた。一室六帖の畳敷に二名が定員で出身中学の異なる上級生と下級生が同室となった。それぞれの友人が出入りするの、いもづる式に顔見知りが増え互いに訪問しあって四方山のおしゃべりをする。これをだべりと言った。だべりの中で先輩が絶えず強調されたことは「読書せよ」、「denken（思索）せよ」の二点であった。中学時代、教科書以外の本を見ることは禁止されていたのでこれには面くらったが、先輩たちも長い戦中の修業年数短縮や勤労働員、陸海軍への入隊などで読書の余裕もなかった分を取り戻そうとするかのように、真剣に読書に励んでおられるので我々もそれに倣った。すすめられるままに河合栄治郎の学生シリーズや倉田百三の「愛と認識への出発」、「出家とその弟子」など日本の文学作品を手始めに、トルストイの「復活」、「戦争と平和」、アンドレ・ジイドの「狭き門」やゲーテの「若きヴェルテルの悩み」、その他、ヘッセ、シュトルム、ケルケゴールの作品、さらに三木清、和辻哲郎、田辺元等の哲学入門書などを読んだ。その日読んだ本の感想や批評、難解な点などを多少ともまとめようと心がけた。先輩たちの大人びた口調に我々も早くその議論の輪に入りたいと切望し、かなり背伸びしてこのような本を読んだ。思索は議論を呼び議論は思索を深めて寮の灯は深夜になっても消えることはなかった。このような毎日が続けて物事は如何にあるべきか、人は如何に生きるべきかを真剣に思考し、真なるもの・高きもの・永遠なるものを求める求道的とも言うべき一途な心を学んだ。これが寮生活で得た最も貴重なものであった。

【運動部】運動部にはラグビー・野球・テニス・バレー・陸上競技・水泳・ボートその他いろいろあり、大抵の生徒はどれかの部に入ることになっていた。各部の運営と練習の指導はキャプテンと幹部各員に任せられ、年一回のインターハイの優勝を旨として練習に励んだ。私はラグビー部に入った。ラグビー部の練習はきびしいことで定評があった。フォワード・バックス・フルバックなど各ポジションの責任を果たすことが強く求められ、自分の気の緩みで他メンバーに負担をかけないように厳しく要求された。一瞬でも気を抜くと「自分だけ楽しようとするな!!」と怒声が飛び、「自分から進んでしんどいことをやれ!!」と叱りとばされた。一方、「常に全体の動きを見るんだ。一瞬の判断の差で勝敗が決まる」と教えられた。新入の我々は叱られっ放しであったが、キャプテンが最も苦しく困難な所へ敢然と突入していく姿に畏敬の念を感じた。「苦しい時は敵も苦しい。がんばり通した方が勝つ」と励まされた。最も強調されたのは責任を果たすこと、率先して難事に当たること。激しい練習が終り「全員集合!」の号令で集合する足どりが鈍いの見とがめたキャプテ

ンは、「集合が遅い!!ペナルティ、グラウンド三周かけ足!!」を命じて自らその先頭に立つ。ようやく「練習終了、解散!」が宣言され、水道の所へ急ぐ。あの頃、練習中は一滴の水を飲むことも許されず、水道の前には長い行列が出来た。しかしキャプテンは少し離れて腕組みして立ち、最後の一人が飲み終るのを待ってから水道へ近づいて行かれた。いつもそうであった。

責任感、犠牲的精神、指揮官先頭……、鉄は熱いうちに鍛えなければならない。叩いて叩いて叩き込んでその人の体の一部になる迄叩きこむ。運動部では大事なことを学んだ。

三、まとめ

旧制高校は寮生活と運動部と教室の三つから構成されていた。寮では読書と思索とだべりの中から深い心の抛り所を学び、運動部では人間精神の根幹を叩き込まれた。教室では与えられた課題を処理する能力よりも、何が問題であるかを見出し問題意識をもってそのことに取組む意欲をもつことがより重要であることを学んだ。これらは人間の基本的素養とでも言うべきものであり、長い人生の途次、殊に大きな決断を要するとき正しい方向を示し、行動を支えてくれた。後年、同窓会などで友人が「オレの一生はあの三年間で決った」と異口同音に言うのはそのことである。

近年、世界的に名を知られた大会社が顧客や株主に虚偽の説明をしていたという出来事が続発している。類似のことが産業界だけでなく他の分野にも波及しており、このように低劣なことが罷り通っている現状に啞然として私は言葉を失った。

かつて旧制高知高校の開校式において東京帝国大学の古在由直総長は「人格と品性の陶冶に絶大の努力を怠るべからず」と訓示され、京都帝国大学の荒木寅三郎総長は「学識と人格を共に修めて初めて大事に就くを得」と諭され、続いて高知高校の内藤馬蔵校長も「学識のみ深きは国家社会にむしろ有害なり。徳性の涵養こそ最も重要」と強調された。この三人の訓示は当時の日本教育の基本方針の一端を示すものと見てよい。

先年、文化庁長官だった三浦朱門（旧制高知高校で私より三年先輩）は同窓との雑談の中で「結局、人間形成、つまり大人の躰だ。戦前は小さい子供の時から皆でやかましく躰をしたが、戦後はコロリと風潮が変わってすぐ役に立つ事を重視し競争主義で基本が忘れられ話にならない」と頻りにぼやいていた。

私が阪大に入学した時、工学部長・南大路謙一先生は「今から諸君を紳士として接する」と宣言され新入生はピリリと緊張した。

応用生物工学科と尚醸会の皆さん、このようなことをどう思われますか？ どうすべきなのでしょう？ 是非考えて頂きたい、御意見を聞かせて頂きたいのです。

二〇二二年五月二十七日

令和3年度 同窓会会計

収入	令和2年度より繰越金	2,891,592 円
	令和2年度年会費	570,000 円
	受取利子	22 円
	合計	3,461,614 円
支出	名簿データ整理委託費	66,000 円
	会報作成費	417,673 円
	尚醸賞賞状・楯作成費	24,013 円
	合計	507,686 円
収支	(令和4年度への繰越金)	2,953,928 円

令和3年度 学生国際活動支援金会計

収入	令和2年度より繰越金	3,439,013 円
	受取利子	30 円
	合計	3,439,043 円
支出	無し	0 円
	合計	0 円
収支	(令和4年度への繰越金)	3,439,043 円

証明書

令和三年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和四年 7 月 25 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除いたしました。

証明書

令和三年度大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）および、学生国際活動支援基金の会計資料（収入・支出内訳、領収書、預金通帳）を監査したところ、正当妥当であることを証明します。

令和四年 7 月 27 日

大阪大学工学部醸造醗酵応用生物工学科同窓会（尚醸会）
会計監査人

Web 版のため印章部分を削除いたしました。

大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会「尚醸会」会則

1. (名称)

本会は「尚醸会」と称する。但し、本会の預金口座名は「醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会」として取り扱うものとする。

2. (会員の構成)

本会は次の会員で構成する。

(1) 正会員

イ 大阪大学工学部，同大学大学院工学研究科ならびにその前身である学校の醗酵・生物工学系の前身学科、専攻の卒業生。

ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。

ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に関係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。

(2) 名誉会員

会員の中から第6条に定める役員会の推薦により総会の承認を得たもの。

(3) 賛助会員

本会の趣旨の賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。

(4) 学生会員

大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースに所属する学生。

3. (目的)

本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。

4. (所在地)

本会の所在地は大阪府吹田市山田丘2番1号 大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内とし、会員の希望により支部を設けることができる。

5. (役員)

本会には次の役員を置く。

- | | | |
|---------|-----|------------------------|
| (1) 会長 | 1名 | 正会員の中から総会で選出する。 |
| (2) 副会長 | 2名 | 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。 |
| (3) 幹事長 | 1名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (4) 幹事 | 若干名 | 正会員の中から会長が委嘱する。 |
| (5) 監査 | 2名 | 正会員の中から総会で選出する。 |

6. (役員の仕事)

本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の仕事は次のとおりである。

- (1) 会長は本会を総理する。
- (2) 副会長は会長を補佐する。
- (3) 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。

- (4) 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。
- (5) 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。
- 7. (役員任期)
役員任期は2年とし再任を妨げない。
- 8. (名誉会長)
 - (1) 本会に、名誉会長をおくことができる。
 - (2) 名誉会長は役員会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。
- 9. (会議)
 - (1) 本会は原則として2年に1回総会を開き、役員改選、会計報告、会則改正、その他重要な事項を議する。
 - (2) 総会の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
- 10. (会計)
 - (1) 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
 - (2) 会費は付則に定める金額とする。
 - (3) 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後50年以上の会員は会費を免除する。
 - (4) 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
- 11. (会則変更)
本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

- 1. 本会の設立日は平成8年11月15日である。
- 2. 生物工学系とは、大阪大学工学部応用自然科学科バイオテクノロジーコースおよび同大学院工学研究科生物工学専攻生物工学コースならびに、それらの前身とする。関連講座については、適宜役員会で協議の上、定義する。
- 3. 本則第9条の会費は次のとおりとする。
 - (1) 会費 正会員は年額2,000円、賛助会員は年額1口 5,000円。
- 4. 本則第4条の規定に従い、本会に関東支部を置く。
- 5. 付則の変更は役員会の議をもって行う。
- 6. 本会則は平成8年11月15日から施行する。

令和3年11月13日改訂

☆同窓会現組織（令和4年度）

会長	関 達治（昭和41年卒）
副会長	二宮保夫（昭和46年卒） 原島 俊（昭和47年卒）
幹事長	福崎英一郎（昭和58年卒）
幹事	
（企業幹事）	櫻井崇弘（平成17年卒）日本盛（株） 野原小百合（平成26年卒） グリコ栄養食品（株） 谷口百優（平成28年卒） （株）島津製作所
（庶務担当）	梶浦 裕之（平成15年卒）、岡橋伸幸（平成24年卒）、安本周平（平成24年卒）、 大橋博之（平成25年卒）
（財務担当）	鳥巢哲生（現教員）、岡野憲司（元教員）
（名簿担当）	大政健史（昭和61年卒）、内山 進（現教員）、Sastia Putri（平成22年英語コース卒）
（編集担当）	松田知己（平成9年卒）、加藤泰彦（現教員）、戸谷吉博（現教員）
（企画担当）	新聞秀一（現教員）、櫻井崇弘（平成17年卒；企業幹事兼）、野原小百合（平成26年卒；企業幹事兼）、谷口百優（平成28年卒；企業幹事兼）
監査	高松 智（昭和44年卒）、塩谷捨明（元教員）

☆会員の動向（最近の動向がございましたら、同窓会までご一報下さい）

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって、住所変更や所属変更となる会員が増えておられます。これらに変更が生じた場合、同窓会（doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp）までご一報ください。なお、お寄せ頂いた個人情報は、尚醸会個人情報保護方針（<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/jusho.html>）に従い、適切に対応いたします。

●クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和 23 年	佐瀬 勝	昭和 48 年	曾根良昭	平成 10 年	田中礼央
昭和 24 年	野口祐一	昭和 49 年	小西喜朗	平成 11 年	永塚由佳
昭和 25 年	足立 有	昭和 50 年	中塚正博	平成 12 年	井戸芳博
昭和 26 年		〃	東浦忠司	平成 13 年	後藤優治
昭和 27 年		昭和 51 年	溝口晴彦	平成 14 年	有岡伸悟
昭和 28 年（旧制）	斎藤 宏	昭和 52 年	根来誠司	平成 15 年	新家康弘
昭和 28 年（新制）	高野光男	昭和 53 年	金子嘉信	平成 16 年	和田 悠
昭和 29 年	嶋谷幸雄	昭和 54 年	高木 睦	平成 17 年	藤井健治
昭和 30 年	大嶋泰治	昭和 55 年	滝沢 昇	平成 18 年	鳳桐智治
昭和 31 年	遠藤靖夫	昭和 56 年	阿野貴司	平成 19 年	高木康弘
昭和 32 年	細見正明	昭和 57 年	片倉啓雄	平成 20 年	木村修一
昭和 33 年	中桐義隆	昭和 58 年	森川正章	平成 21 年	外尾竜太
昭和 34 年	野本哲也	昭和 59 年	藤山和仁	平成 22 年	井村 誠
昭和 35 年	森元英雄	昭和 60 年	中嶋幹男	平成 23 年	吉田真理
昭和 36 年		昭和 61 年	大政健史	平成 24 年	吉田隆史
昭和 37 年	菅 健一	昭和 62 年	山本恵三	平成 25 年	長澤宏器
昭和 38 年	吉田敏臣	昭和 63 年	向由起夫	平成 26 年	都倉知浩
昭和 39 年	藤田正憲	平成元年	永尾寿浩	平成 27 年	小幡佑季
昭和 40 年		平成 2 年	松本雄大	平成 28 年	吉富耕太
昭和 41 年	関 達治	平成 3 年	鈴木市郎	平成 29 年	花谷耀平
昭和 42 年	卜部 格	平成 4 年	内山圭司	平成 30 年	光吉祐太郎
昭和 43 年	関口順一	平成 5 年	滝口 昇	平成 31 年	有島凜太郎
昭和 44 年	土戸哲明	平成 6 年	松浦友亮	令和 2 年	黒田将輝
昭和 45 年	古川憲治	平成 7 年	永久圭介	令和 3 年	安倍 玲
昭和 46 年	山本忠行	平成 8 年	金谷 忠	令和 4 年	川本優一
昭和 47 年	島田裕司	平成 9 年	小林 肇		

* 昭和 22 年以前は、クラス幹事不在のため省略しております。

* クラス幹事が不在の学年は、ご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。

* 各学年での同窓会等の行事を開催した場合は、是非同窓会までご一報ください。その際には、簡単な概要説明と写真などを添えて頂けると幸いです。

会員各位

名簿担当からのお知らせとお願い

①大阪大学生涯メールアドレスをお知らせください。

大阪大学を卒業・修了された方に、生涯使えるメールアドレス「XXXX @ alumni.osaka-u.ac.jp」が大阪大学から提供されています。大阪大学の Web メールシステム (OUMail) を用い、インターネット環境下ならどこでも送受信でき、自動転送設定も可能です。

平成 26 年 3 月以降の卒業・修了生＝すでに利用可能です

卒業・修了時、全員に OUMail 生涯メールアドレスが設定されています (申し込み不要)。

アドレスは、卒業の翌月初めに、在学中の大阪大学個人 ID をもとに自動で切り替わっています (例: u123456a@ecs.osaka-u.ac.jp ➡ u123456a@alumni.osaka-u.ac.jp)。

※在学中のパスワード、メールデータ、連絡先などの設定は自動で引き継がれます

※大阪大学の中で進学される方には、その課程を修了後に贈呈します

平成 26 年 2 月以前の卒業・修了生＝新規発行となります

アドレスは、申込者の氏名に基づき、下記の形となります。

【姓 - 名 - 英字 2 字 (自動割り当て)】@alumni.osaka-u.ac.jp

申し込み等、詳細は下記の大阪大学の HP をご参照ください。

(<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus/alumni/support/oumail>)

なお、生涯メールアドレスを取得された後、doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp にもアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。尚醸会からの同窓会案内等を当該アドレスにお送りさせていただきます。

②個人情報保護法の改正について

個人情報保護法の改正にともない、尚醸会の管理する個人情報も当法案の対象となりました。尚醸会では、すでにプライバシーポリシーを設定 (2009.11.13) しており (<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/kojin.pdf>)、改正された個人情報保護にも対応しておりますのでご安心ください。

令和4年度会費の納入をお願いします

会員各位

拝啓、ますますご清祥のことと拝察します。

ご承知のとおり本会は皆さまの会費で運営を行っております。つきましては皆さまに会費の納入を是非ともお願いする次第です。

なお、下記要領で令和4年度会費の納入をお願いしております。

記

1) 郵便振替にて納入される場合

同封の払込通知票を用いて、最寄の郵便局にてお振込下さい。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

金額：2,000 円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込まれる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お申し込み下さい。

今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費2,000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合上10月15日までにお願い申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

払込開始月：令和4年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。

自動払込手続きをされた方は振込用紙で振り込まないようにご注意ください。)

♪♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪♪
いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有り難う御座います。
同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

令和4年度は昭和47年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有り難う御座いました。今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科

同窓会会報 第25号

令和4年9月15日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 福崎 英一郎 (昭和58年卒業)

〒565-0871

吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科生物工学専攻内

ホームページ

<https://www-bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>

電子メール

doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp